

## 第2節 住まい

### (1) 屋敷構え

板倉町の農家の屋敷構えは、通りに面して北側に屋敷地を設ける場合が多く、母屋が正面に配置され、広い前庭・畑を有するのが基本である。通りの南側に屋敷地が接する場合は、直接通りに出入口を設けず、路地を出入口としている。母屋は基本的に南を正面とし、母屋以外には納屋や土蔵などが配置され、敷地の北西側を屋敷林で囲んでいる。これは、利根川中流域一帯における伝統的な農家の屋敷構えの形式である。加えて、自然堤防集落では、屋敷全体あるいは一部を盛土（ちぎょう地形）した上に主屋や納屋を建てる例が多く、さらに部分的に1～2m程度盛土を施し、水塚を建てて水害の備えを行っている。母屋は近世以来、茅葺建物が多かったが、屋根の改造や建替えが進んで、今ではほとんど見られなくなっている。

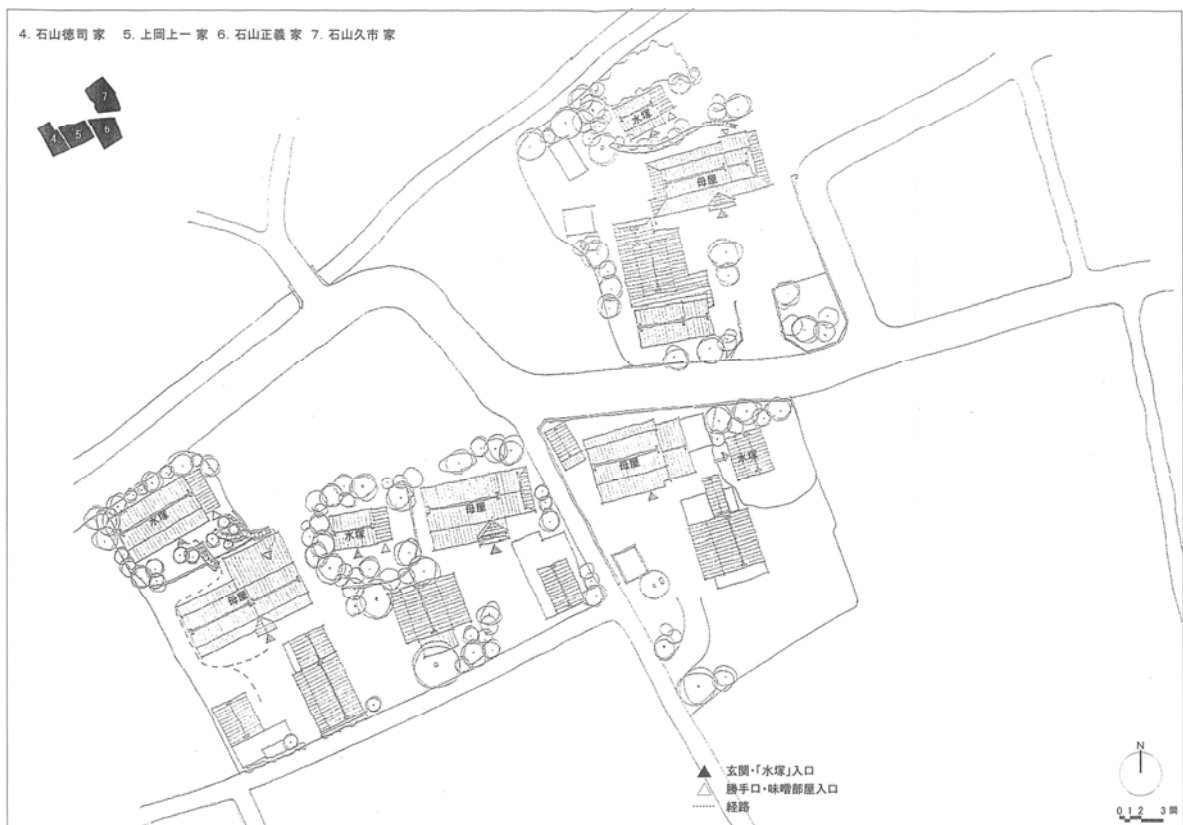


図 1-3-6 自然堤防集落における伝統的な屋敷構えの例（大荷場）  
（2005「板倉町「水塚」屋敷構え調査」）

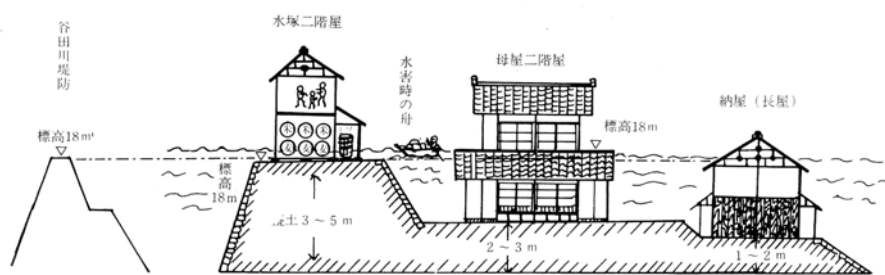


図 1-3-7 水塚のある屋敷地の断面模式図（（1980）『板倉町史別巻四』 p. 65）

## (2) 水塚

### 1) はじめに

今回は板倉町に今も残る水塚（以下、建物部分を「水塚」、土盛り部分を含めた総称を水塚（カギカッコをつけない。）と区分する。）や水塚のある屋敷構えが板倉町の農村景観に対してどのように影響しているのか、近年実施した下五箇地区の屋敷構え調査を例に考察してみたい。

### 2) 水塚について

水塚（ミツカ、ミズカ、ミズツカなどとも呼ばれ、建物部分を特にクラ、あるいはクラヤと呼ぶこともある）とは、利根川をはじめとする関東平野に流れる河川の中下流域で洪水の際にたびたび水害の脅威にさらされた地域に見られる建物の形式である。水塚が存在するのはそのような立地条件を持ち、且つ農村地域に限定される。形式は屋敷内に一段高い土盛を築造し（堤防など自然地形を利用する場合もある）その上に避難用建物を載せている。出水時に命や家財道具などを避難させておく水防建築としての「水塚」の出現は近世の新田開発によって人々がそれまでより低地に移住してきたことに関係していると考えられる。

ちなみに「水塚江逃登り候」と水塚へ避難した旨の記載は、文政6（1823）年荻野家文書に初出する。また、現存する最古の「水塚」は天保元（1830）年（小野田儀一宅）である。

このように水防目的で、屋敷内の一角に土盛りをし、その上に建物を建てる形式は、全国的に見られる。

代表的な水防建築は岐阜県の本曾三川流域の輪中地域における「水屋」や大阪府淀川流域の「段倉」、新潟県信濃川流域の水防施設（一般に「水倉」と呼ばれる）、岩手県北上川流域の「水山」などがある。

### 3) 板倉町の「水塚」

板倉町の「水塚」については、平成13（2001）年の調査において155棟の「水塚」の存在と、過去に行なわれた調査（昭和54年）と照らし合わせ、337棟の「水塚」が消滅していることを確認した。

また、平成15（2003）年には、現存「水塚」のうち113棟の実測調査を行った。この調査結果は、平成16（2004）年に報告書にまとめた（2004『水防建築「水塚」調査報告書』）。ここまでの調査の主な目的は、町内に残る「水塚」の現存数を確認すること、実測調査を行い水防建築としての建築的な特徴を明かにすることにあつた。

しかし、調査から水防以外の日常的な使用について「水塚」が大きな役割を果たしていること、たとえば「味噌部屋」・「木小屋」など「水塚」に付随する水防目的以外に使用された付属屋の存在、防風林の代わりにする位置に築かれた土盛り、穀物貯蔵ならびに家財道具を収納しておくための蔵（あるいは倉）としての役割などが判明した。こうしたことから「水塚」は単に水害時の避難用のみに作られてきた建物ではなく、「水塚」を持つ家では日常生活においても使用されていたこと、また、「水塚」の所有が農家に多いこと、穀物の貯蔵倉庫として「水塚」を利用していたこともわかってきた。

#### 4) 「水塚」のある屋敷構え

こうした経緯から、「水塚」は水防建築としてのみ捉えるのではなく、農村の日常生活に根ざした視点から見直す必要があるとの認識を得た。

そこで、平成 18 (2006) 年に町内で「水塚」と、「水塚」が使用されていた同時期のオモヤが残されている 26 件の屋敷構え調査を行ない、屋敷内で水塚がどのように配置され、使用されてきたかを確認し、水塚の果たす役割を明らかにした。

調査は屋敷構えのなかでもオモヤと「水塚」の関係を中心にして屋敷全体・オモヤ・水塚の写真撮影、水塚登り口の確認、オモヤから「水塚」までの経路について聞き取りを行い、同時に屋敷構え図を作成した。

この調査により判明したのは、次の点である。

- ① 味噌部屋を持つ「水塚」が、オモヤ勝手口に近い位置に配置されていること。仮にオモヤと「水塚」が離れていても勝手口から水塚に至る経路（水塚に登る階段やスロープ）が存在する。
- ② 屋敷林や裏山を持つ屋敷では木小屋がついているケースも目立つ。
- ③ 水塚が防風林の目的と同じように冬の季節風を防ぐのに有効に活用されている。
- ④ すでにあった環境のまま「水塚」が建てられる条件を持つ屋敷（屋敷内に堤防続きの場所がある場合）でも、屋敷内の別の位置に土盛りを施し「水塚」を設置する家が存在する。

以上から、「水塚」の位置は、避難時のためにオモヤのそばに置かれるのを大前提としながら「水塚」を所有する家の事情や地域の環境特性（季節風、耕作地、屋敷林、隣家の存在、堤防、接道）などによって決定されていると考える。

#### 5) 下五箇地区の水塚と屋敷構え

以上のことを踏まえ下五箇地区の水塚を持つ屋敷構えを例に考察をしてみる。

下五箇地区は谷田川右岸に位置し、旧合の川堤防上の道路に沿って集落が点在する。調査から当地区は、現存と消滅した「水塚」数の合計が、町内で最も多く確認されている地域であるが、現存する「水塚」数は 16 棟を数える。町内では海老瀬地区についで多い地域である。

屋敷構え調査は、16 棟中 10 棟について行なった（図 1-6-3）。また、屋敷構え図を図 1-6-4 から図 1-6-11 に示し、解説をそれぞれの図に付した。

なおNo.は『水防建築「水塚」調査報告書』に準拠する。



图 1-3-8 下五箇地区屋敷位置图（上部北）

① 折原節男家 (No. C09-04)

折原家の「水塚」は土盛りの高さ 2.5 m ほどの独立型であり、母屋西側に建つ。

「水塚」は土蔵造り 2 階で、正面に下屋庇を差し出す。建築は明治末と伝えられており、敷地内他の場所から水塚上に移築してきたらしく、かつて同場所には石蔵と味噌小屋が建てられていたという。

階段状の水塚登り口が土盛り南西側に設けられている。

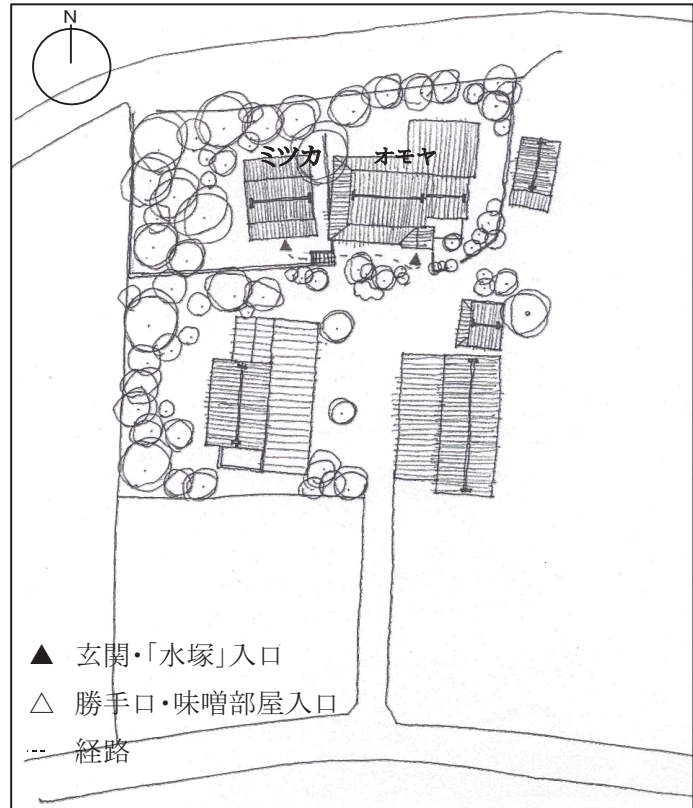


図 1-3-9 折原節男家 配置図

② 吉田平一家 (No. C09-05)

吉田家の「水塚」は、堤防上に位置し、土盛りの高さは 2 m ほどで、母屋南東側に建つ。

「水塚」は木造平屋で、規模は 2 間 × 1.5 間と比較的小さく、下屋、付属屋ともにもたない。以前は「水塚」をもたなかったが、もしものことを考え、平成に入ってから建築をした。

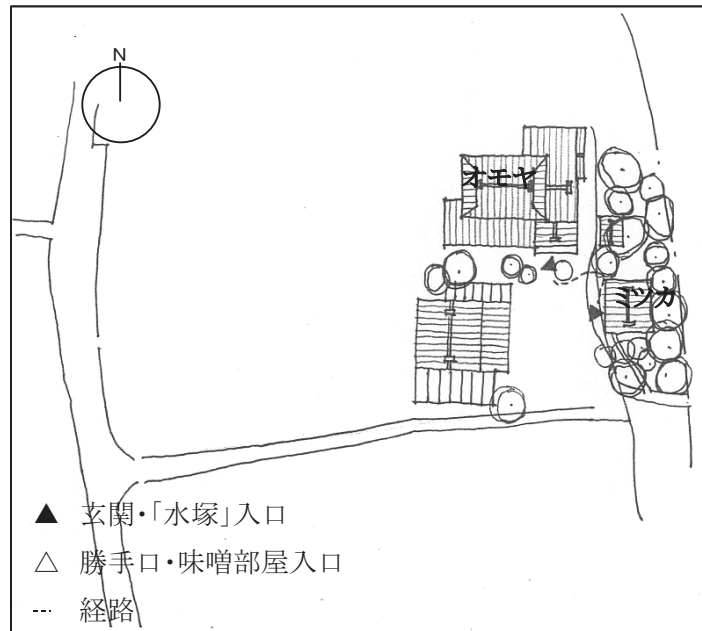


図 1-3-10 吉田平一家 配置図

③ 石川節雄家 (No. C09-06)

石川家の「水塚」は、土盛りの高さ 3.5mほどの独立型であり、母屋北側に建つ。

「水塚」は正面に下屋庇を差しだし、付属屋はない。構造は木造2階建てで、1階内部東側には天井の高い床下収納を備える。また、1階内部西側は部屋が分かれていて、米の収納場所として使用されていた。

水塚登り口は一カ所、土盛り東南にあり石段がつく。

当時の母屋台所と「水塚」との関係は不明である。



図 1-3-11 石川節雄家 配置図

④ 新井九二二家 (No. C09-08)

新井家の「水塚」は、堤防上に位置し、土盛りの高さは2mほどで、母屋南東側に建つ。

「水塚」は3正面と裏に庇を差しだし、付属屋をつけ味噌部屋としている。

味噌部屋は以前よく使用していたといい、行き来は母屋台所勝手口からであったという。

現在確認できないが、水塚登り口は、以前「水塚」北西側にあった。

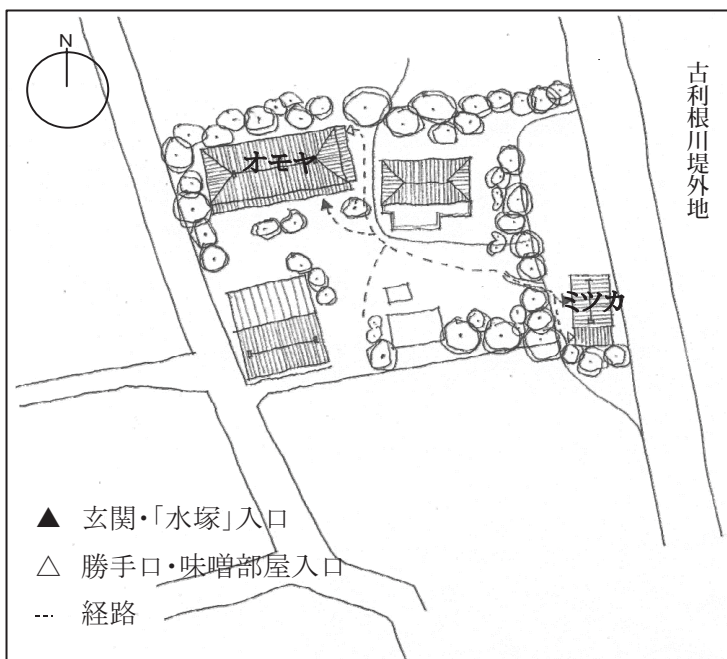


図 1-3-12 新井九二二家 配置図

⑤ 茂木一男家 (No. C09-09)

茂木家の「水塚」は、土盛りの高さ2.5mほどの独立型であり、母屋南西側に建つ。

「水塚」規模は、4間×3間と比較的大きく、正面と裏面に下屋庇を差しだし付属屋をつけ、味噌部屋としている。

明治43(1910)年の出水時には、すでに現「水塚」が存在していたといわれ、内部1階を土間でなく板張りとしている。

以前、味噌部屋には醤油樽などを貯蔵していたといい、行き来は母屋玄関からであったという。

水塚登り口は、スロープ状に南東側につく。

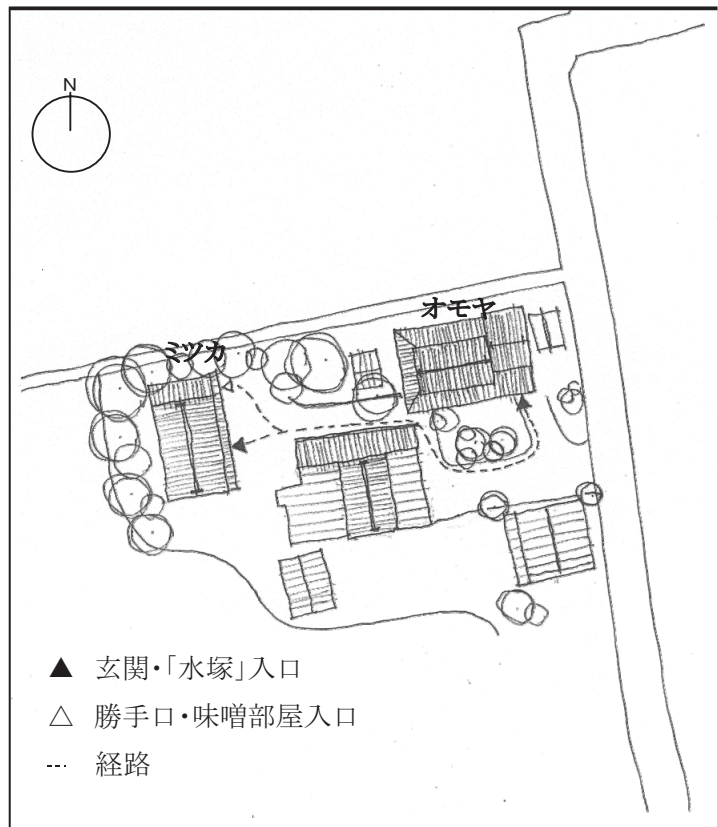


図 1-3-13 茂木一男家 配置図

⑥ 小暮新八家 (No. C09-10)

小暮家の「水塚」は、堤防上に位置し、土盛りの高さは2.5mほどで、母屋南東側に建つ。

「水塚」は、正面と正面左側に下屋庇を差しだし、付属屋を正面右側と裏側につけ、それぞれ味噌部屋と木小屋として使われていた。

戦時中の一時期、この「水塚」を疎開してきた親戚に開放しており、そのときに内部を改装している。

現在は味噌部屋を趣味の部屋として改造し、使用している。

水塚登り口は、正面にコンクリート製の階段がつくほか、堤防側からの出入りは正面左側からも可能である。

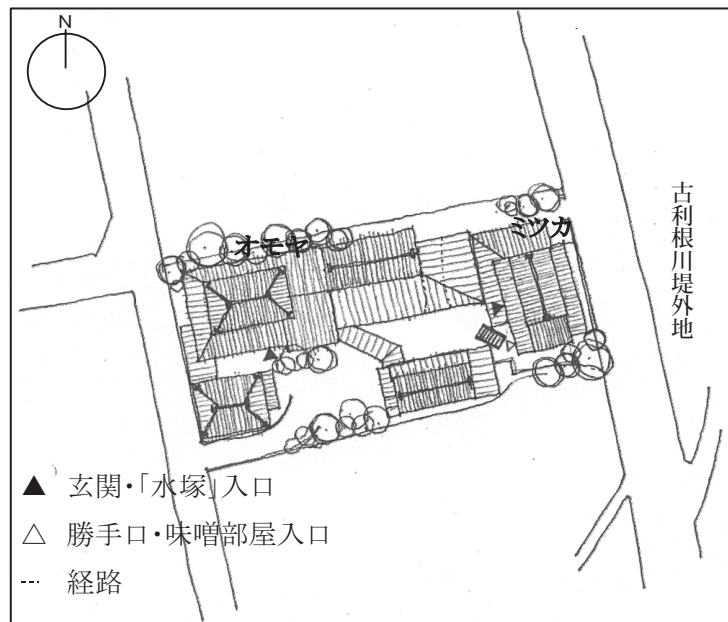


図 1-3-14 小暮新八家 配置図

⑦ 岡田嘉市家 (No. C09-11)

岡田嘉市家の「水塚」は、堤防上に位置し、土盛りの高さは2.5mほどで、母屋南東側に建つ。

「水塚」は、正面に下屋を差しだし、付属屋をつけ味噌部屋としている。水塚登り口は、正面にあり、石段がつく。当時の母屋台所と「水塚」との関係は不明である。

⑧ 落合一郎家 (No. C09-12)

落合一郎家の「水塚」は、堤防上に位置し、土盛りの高さは2.5mほどで、母屋南側に建つ。

「水塚」は、土蔵造り2階建て妻入りとしている。下屋や付属屋はもたない。近年内部を改造しており、収納と趣味の部屋として活用している。水塚登り口は、妻側にスロープ状に造られている。当時の母屋台所と「水塚」との関係は不明である。

⑨ 岡田昭平家 (No. C09-15)

岡田昭平家の「水塚」は土盛り高さ 2.5mほどの独立型であり、母屋北側に建つ。

「水塚」は、正面に下屋庇を差しだし、付属屋がつき味噌部屋としている。水塚登り口は正面に設けられている。当時の母屋台所と「水塚」との関係は不明である。

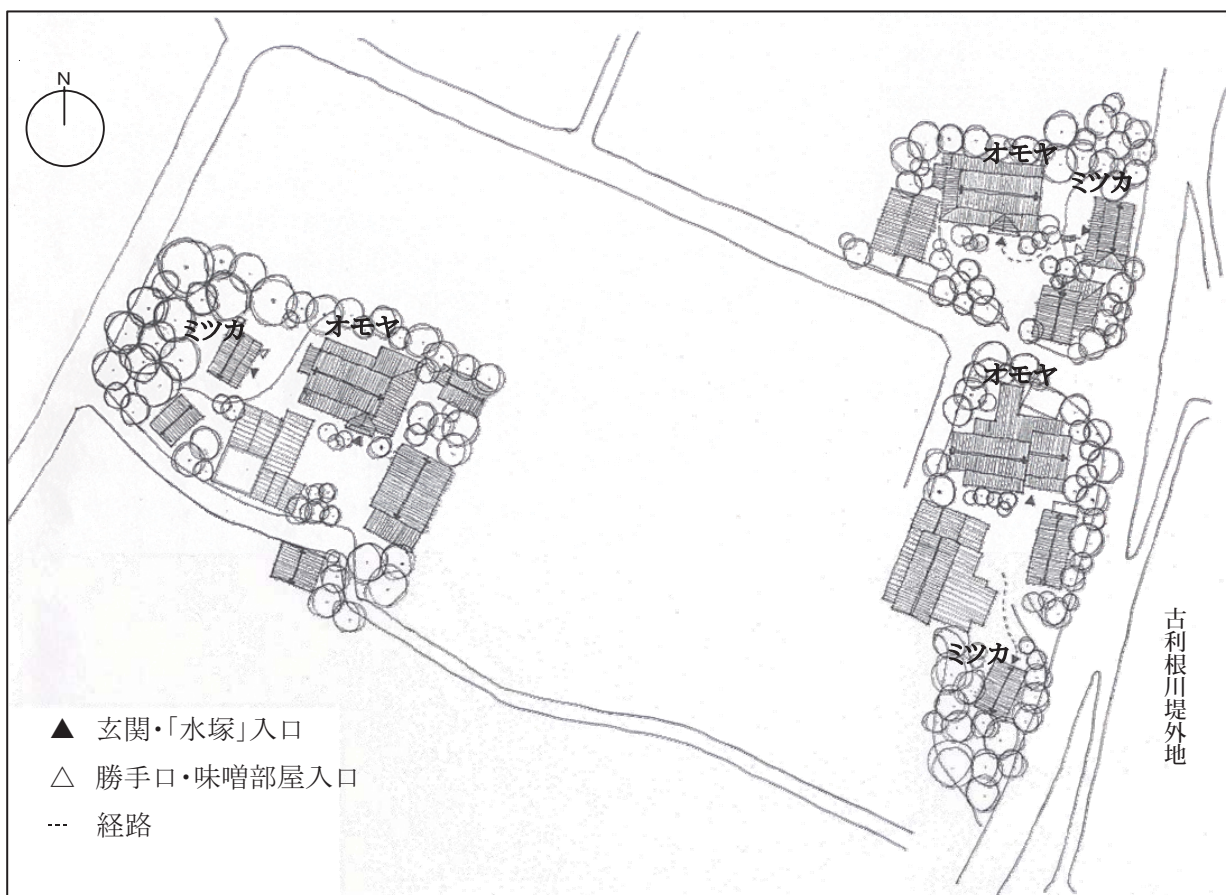
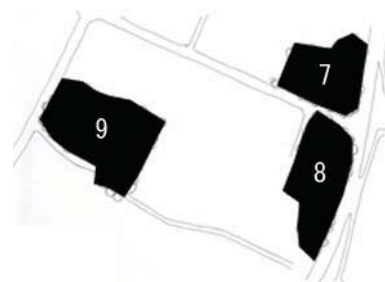


図 1-3-15 岡田嘉市家・落合一郎家・岡田昭平家 配置図



⑩ 高野政樹家 (No. C09-13)

高野政樹家の「水塚」は、土盛りの高さ2.5mほどの独立型であり、母屋北側に建つ。

「水塚」は、正面に下屋庇を差しだし、付属屋がつき味噌部屋としている。水塚登り口は、正面につく。当時の母屋台所と「水塚」との関係は不明である。

⑪ 関根 修家 (No. C09-14)

関根家の「水塚」は、土盛りの高さ2.5mほどの独立型であり、母屋北側に建つ。

「水塚」は、妻入りで入り口脇に小屋がつき、味噌部屋としている。水塚登り口は、南東側にあり石段となっている。法面は東の一部から南側にかけて石積みがされている。当時の母屋台所と「水塚」との関係は不明である。



図 1-3-16 高野政樹家・関根 修家 配置図

## 6) 環境特性から見た水塚の配置について

水塚を景観の観点から見ると、屋敷内における水塚位置の重要性が高くなる。

すなわち、集落を見たときの屋敷林とその続き、あるいは屋敷林の代わりとして存在する水塚や堤防上に位置する水塚のある風景は、この地区の景観の重要な要因になっているのである。

そこで集落全体の景観を見たときに注目される堤防や屋敷林、水塚などが各屋敷でどのように配置されているか、水塚位置がどのような要因で決定されているのかを探るために、水塚と周辺の環境との関わりを表 1-3-1 にまとめてみた。

板倉町における過去の水塚調査では、「水塚」が水害時に避難する用途のみに使われていることとされていたが、日常的な用途にも使用されていたことから、立地場所を決定する要因として以下に挙げる a～g までの項目を示した。

### a オモヤ

オモヤの、特に勝手口から見た水塚の配置を調べた。

水塚の日常的な使い方の一つに、勝手口を通る台所との関係がある。味噌部屋など頻繁に行き来する水塚の配置がオモヤから見てどの位置にあるかで、オモヤ裏に水塚が位置するのは味噌部屋がつくか、離れとして住まいとしても使用しているかどちらかであった。

オモヤ周辺に水塚を置かないケースでは、水塚に味噌部屋も離れもないことがわかる。

家財道具の頻度については、水塚内で日常的にもの出し入れをするかということ、これに関しては、毎日使うような家財道具の出し入れはなく、すべて現在は不要なものをしまっておくためのスペースになっている。

### b 堤防

下五箇地区は、堤防沿いに集落が形成されていることから、堤防続きに屋敷がある場合に、水塚が堤防を利用して作られているかどうかを調べた。

結果、堤防続きに屋敷のある 8 件中、堤防続きに水塚があるケースは 5 件で、堤防外が 3 件であった。

### c 屋敷林

屋敷内に屋敷林が分布するかどうか、また、屋敷林の代わりをする（オモヤを暴風から守る位置に）水塚があるかどうかを調べた結果、水塚が防風の役目を果たしていると思われるのは 11 件中 6 件で、水塚と屋敷林の関係がないと思われるのは 2 件あった。○印のつかない 3 件はオモヤ周囲が隣家と接しているため、屋敷林を置かなくても良い環境であった。

### d 隣家

周囲のどの位置に隣家があるか、ないかを調べた。

### e 接道

屋敷と道との取り付き方の関係を調べた結果、11 件中、屋敷に 1 方向のみ道が取り付くのは 5 件、2 方向に取り付くのが 4 件であった。2 方向に道が取り付いているケースでは、4 件中 3 件がオモヤ表側に道が取り付いている。

### f 裏山

裏山と水塚の関係は、水塚に木小屋など裏山から枝などを運んで蓄えておく場所があるかと、裏山が屋敷続きに存在するかを調べた。

裏山の存在があるのは、11 件中 1 件で、水塚裏に下屋庇があり、その場所に裏山から運んできた枝を置いていたようである。

g 耕作地

屋敷の周囲にある耕作地と水塚の関係を調べたのは、水塚築造時の土の調達場所としての重要性からである。

堤防を利用しない、あるいは堤防が屋敷内にないケースで水塚が建つケース（11 件中 6 件：以下、堤防なしケース）と、屋敷内の堤防続きに水塚が建つケース（11 件中 5 件：以下、堤防ありケース）を比べてみると、「堤防なし」の場合は周囲 4 方向中、平均 2 方向に耕作地が隣接しているのに対し、「堤防あり」の場合は平均 0.6 方向となった。

7) まとめ

今回は下五箇地区を例に取り屋敷内における水塚の配置決定要因についてオモヤ位置をもとに周辺の環境がどのように屋敷に影響を及ぼしているか、関係が深いと思われる項目を拾い出し表にまとめた。

過去の実測調査から水塚が非常時のみでなく日常生活の場でも使用されていたことは明らかであり、今回さらに屋敷や屋敷周辺に考察範囲を拡げてみた結果でも日常生活において使用されていたことはもちろんのこと他の災害についても存在する理由が明らかになった。

また水塚とオモヤの関係や屋敷林としての水塚の関わりを見ると、堤防続きにあっても堤防を利用しない水塚のケースに出水時のみでない水塚の配置決定条件が判明する。

今後、水塚の配置要因と環境特性との関係を調査により、また調査から得られた結果で水塚と他地域の水防建築との形式の相・類似点について明らかになることにより、板倉町の景観を“農”風景としてみたときに水塚が果たす役割が一層明確になると考える。

(加藤誠洋)

表 1-3-1 水塚の配置特性（下五箇）

水塚および屋敷との関係			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
			折原節夫	吉田平一	石川節雄	新井九三	茂木一男	小暮新八	岡田嘉市	落合一郎	高野政樹	関根修	岡田昭平	
a オモヤ	配置	裏			○							○	○	
		側面	勝手側							○				
	付属屋	味噌部屋	○		○								○	○
		家財道具	頻度	高	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	離れ (水塚内)	当初よりあり												
		後の増改築(往時)												○
後の増改築(現代)								○						
b 堤防	敷地の一部の堤防上に建つ			○		○		○	○	○				
	敷地の一部の堤防上に建たない							○				○	○	
	敷地内に堤防がない		○		○								○	
c 屋敷林	漁撈用の付属屋													
	水塚続きで存在													
	水塚に関係なく存在			○		○								
d 隣家	屋敷林の代わりとなる水塚の存在		○		○		○					○	○	
	オモヤ玄関から見て	裏							○	○	○		○	
		左			○									
右		○	○					○	○	○				
e 接道	オモヤ玄関から見て	裏						○		○				
		左		○		○	○	○	○				○	
		右	○					○			○	○		
f 裏山	存在	裏												
		左												
		右												
g 耕作地	水塚から見て	裏	○	○	○	○						○	○	
		左	○										○	
		右	○										○	
		表							○				○	
	付属屋(農具)													

註：文章中の水塚の N0. は板倉町教育委員会 2004『水防建築「水塚」調査報告書』による。

### (3) 屋敷林

屋敷地の北西側には、防風林としての屋敷林が植えられている。特に、水塚のある屋敷では、土盛部分の法面にも樹木が生育し、これは、樹木根によって地盤を固めるという効果や洪水時における防水の効果も有していると考えられる。また、屋敷林を伐採し、薪としての利用もみられた。屋敷林の構成種は、エノキ、ムクノキ、ケヤキ等が多く、これらの樹種は自然堤防の環境に対応した郷土種であり、また水防にも有効なモウソウチクやヤダケ等のタケ類を多く見出すことも出来る。



写真 1-3-19 水塚と屋敷林 (昭和 50 年代)



写真 1-3-20 屋敷林